

## 國語、國字の問題

矢田部達郎

### 一、日本語の長所

(一) 今から二百年ばかり前、物理學の方で「最小作用の法則」の提唱者として有名なフランスのモペルテュイ (Maupertuis) と云ふ人はその言語的表現手段に關する論文中に於て表意文字と表音文字との長短を比較し、表意文字は支那文字に於けるが如く文字を見ることによつて直ちに物の特徴を理解しうる長所を有するが、文字數の無限の増大を來たす缺點があり、表音文字は字數を限定すればするほど長たらしくなる缺點があるから、理想的な記音法は恐らく兩者の折衷的使用にあるのであらうと説いた。彼れは東洋の事情にも精しく、日本の鍼灸術の如きも科學的檢討の結果有效であることが分かれば歐洲にも輸入すべきことを薦めてゐるほどであるが、日本語が彼れの理想とする記音法を使用してゐることに氣

付かなかつたやうである。

(二) モペルテュイは更らに所謂「普遍的言語」の問題に論及し、概念を少數の普遍的なものに限定することは思想を貧困ならしめ、且つ各國共通のものにすることは實際的にも不可能と思はれるが、構文的要素は共通にすることが可能であり、例へば名詞は常に不變なる同一語尾を有し、數と格とに對して夫々一定の冠詞を取り、形容詞と副詞も夫々常に不變なる同一語尾を與へられ、動詞も亦常に同一語尾を有する不定形に、時と相とに對して一定副詞を取るやうな言語を作るならば、而してこれに對する單語の完全なる辭書さへ作られるならば、我々は容易にかゝる言語を理解することができ、又我々の欲するところを他人に理解せしめることができるであらうと説いた。これはザメシホーフがエスペラントを創作し

た時よりも百三十四年以前のことである。日本語は概念に相當する部分に表意文字を當て、文法的要素には表音文字を當てて、殆んどモベルテュイの理想に近い言語を構成してゐる。

(三) モベルテュイはその言語の起源に關する別の論文に於て、我々が文章に相當する全體的經驗中から如何なる知覺部分を抽出して概念を作るかは各言語の發生時に於ては自由であり、それによつて最初に定着される概念の性質を異にし、又それを基礎とする高次の概念構造を異にするやうになることを指摘してゐる。例へば木についてその空間的擴がりを實體とし、色や形を屬性とする代りに、色や形を實體とし、擴がりを屬性と考へることも理論的には可能である。そこに各言語の特色が現はれる。この點は直ちに日本語の長所とはならぬけれども、他國語との關係に於て見逃がすべからざる重要意義を有するものと云ふことができる。精神の創造性は異質的なもの、辯證法的發展のうちに求められる。日本語は又從つて日本の思想は世界思潮に對してこの異質的要因の役割を演ずる重大任務を與へられてゐるのではなからうか。

それはモベルテュイが指摘した概念の特異性によるばかりでなく、それ以上更らに日本語の語序の特異性によつても營まれるに相異なる。現代の世界思潮は印歐語に規定されるところが多いのは云ふまでもない。これに参加する有力なる言語は支那語であらう。併し支那語の語序は印歐語のそれに近い。その他に有力なる言語はウラル・アルタイ系を代表する日本語より他にはないのである。而もこの種の言語に於ける語序は全く前二者のそれと異なつてゐる。語序が思想に及ぼす影響は極めて大きい。支那語は文法的要素を表はす特殊の外的形式をもたず、それは主として語序によつて表現される。この點に關してフンボルトの如きは支那語が外的文法を缺如するため、支那人に於てはその代償として内的文法に對する感覺が著しい程度に於て發達し、これによつて彼れらの精神的水準が向上したと云ふ説をなしたほどである。この説の當否は別として、支那語よりも更らに一段と印歐語を離れた日本語を維持することによつて、我々は世界の新たなる創造的發展の種子を保存しなければならぬ。

(四) 日本語の長所の第四として我々は日本語が抽象的

思想を表現するに極めて有效なる手段を有すると云ふ點を擧げることができる。言語は素より我々の具體的行動を代表するものとして發達した。而して具體的行動の代表としての言語は極めて原始的なもので事足りる。然るに或る言語を使用する民族の發展はその言語が如何なる程度まで抽象的思想を代表する可能性を有するかと云ふことに依存するところが多いと考へなければならぬ。歐洲語は抽象概念を構成する有力なる手段を二種類もつてゐる。一つは *skema* 等の如き前綴を具體語に附加すること、他はギリシア・ラテン系の語を使用することである。抽象的思考は結局法則的思考であるから、科學的記號の使用を第三の手段として擧げられることもできるが、これは各言語を超越した一般的手段であり、且つかゝる記號を日常會話等に於て無數に使用することは不可能であるから、こゝにはこの手段は暫らく論外に置くことにしよう。日常言語によつて表現される謂はゞ低次の法則的思想は全く具體的であつてはいけなると同時に、やはり何等かの點に於て具體的思想に對する繋がりや直觀的に保有するものでなければならぬ。この意味に於て上

記の二つの手段は極めて有效なものであると云ふことができる。日本語は不幸にしてそのうちの第一に擧げた手段をもつてゐない。これに反して第二の手段は漢語の輸入によつて歐洲語のそれよりも更らに自由發達せしめられた。漢字は前にも述べたその直觀性によつて我々に思想の具體的地盤を想起せしめながら抽象の世界を馳駢する可能性を提供する。而もその結合の容易性によつて如何なる抽象概念もそれによつて表現しえないものはない。結合はそれ自身又新らたなる思想の搖籃でもある。かくて日本語は世界無比なる高級言語を構成した。

## 二、客觀的情勢の變化

エラリス！併し全ては過去の夢に過ぎなかつた。マンモスもアヂヤンタの藝術も客觀的情勢の變化によつて過去の遺物として葬り去られなければならぬ運命を控つてゐた。今我々も亦かゝる運命の審判の前に立たされてゐるのである。我々は果して日本語の長所を保存しながら而も新らたなる客觀的情勢に順應して行くことができるであらうか。この間に答へるためには先づ謂ふところと客觀的情勢の變化とは如何なるものであるかを明らかに

しなければならぬ。情勢變化の第一に擧ぐべきものは今次の敗戦ではない。それは敗戦の原因となつたものと同一事態であつて、既に百年の永きに亙つて日本をそのうちに取り入れた世界情勢であると云ふことができる。世界の進運はよかれ悪しかれ印歐語系の民族が支配的役割を演じてゐる潮流に押し流されてゐるので、この潮流に逆らふものはその生命を維持することができない。この自明の理を負け惜しみで無視しようとしたのが日本の政治であつて、その結果日本は政治的敗残者の烙印を押されることになつた。文化の面に於ても今にして深く反省し、この難局に善處するのではなければ、何時かは政治と同じ破滅が待ち受けてゐることは火を見るよりも明らかである。云はなければならぬ。情勢變化の第二はラヂオの發明であつて、從來印刷術を高等思想交流の主要手段としてゐた時勢が今後その半ばをこのラヂオに譲らなければならぬ時勢に移り變つたと云ふことである。印刷術は視覚を媒介者とし、ラヂオは聴覺を媒介者とする。こゝに日本語の長所として擧げた四點のうち(一)(四)の三點はその價値を失ふことになつた。情勢變化の第三はタイ

プライタアの發明であつて、今後は更らにこれによる歐字の利便を増加し、比較的な意味に於て漢字の不便を増大するであらうことが豫想される。かくの如きは一見末梢的事象のやうにも見えるが、我々は油繪具の發見が繪畫の様式を一變せしめた先例などを忘れることができない。

かく客觀的な情勢變化は比較的簡單であるが、その影響は極めて深刻であると云はなければならぬ。併し第一の條件たる日本が歐米文化の潮流に掉さなければならぬと云ふ點については在來と雖も我々に全く準備がなかつたわけではなかつた。唯近視的な國粹主義と出世道徳と云ふ舊來の陋習とによつてその効果を充分に擧げることができなかつたのである。出世道徳の弊害については人々は未だ充分に反省してゐないやうにも見えるが、極端なる國粹主義の弊害については、いやと云ふほど苦汗を飲まされたのだから、今後は今迄よりけうまく行く可能性があるとも云へる。そのためには眞に文化を愛し學問を愛する學者から成る大規模な文化交流機關を設けて世界の進運に遅れないやうにすることが不可缺の條件で

ある。さうすれば言語に關する限り大衆は自ら外國語を學習する必要はないであらう。第三の條件、即ちタイプライターに關する件は第二の條件、即ちラヂオの發明に對する對策がうまく行けばおのづから解決されると思ふから、特にそれについてこゝに考察することは省略することにしよう。

扱つてラヂオの發明によつて言語が再度聽覺運動的存在となり、視覺の介入を許さなくなつたと云ふことは一見末梢的に見えて、而も日本語にとつては由々しき大問題なのである。何故ならば近代日本語の長所は前にも述べたやうに、凡て言語の視覺的構成要素を前提として發達して來たものだからである。凡ゆる困難は實にこの末梢的と見える小變化のうちに胚胎する。視覺的構成要素を依憑點として成立した藝術品からその依憑點を取り去るとすれば、即ち漢字を廢止するとすれば、それは作品の崩壊を來たすことは免れないところである。従つて我々は漢字に固執して世界の進運に遅れ、文化の面に於ても敗殘者となるか、或は漢字を廢止して、廢止するとすれば當然ローマ字を採用することになるが、この場合從來

の抽象的思想を表現する手段の代替者を見出すことができないとすれば、單なる具體的思想を表現しうるに過ぎない原始的言語の段階に轉落するかのディレンマに立つのである。このディレンマを切り抜ける道はあつさり日本語を廢棄して純然たる英語國民となるか、日本語を從來のままに保存して英語を並用するか、或はローマ字を採用して抽象的思想の表現手段に對する代替者を工夫するかかの何れかになるものと思はれる。第一の道は日本語に對する愛着の情を別にしても、世界の文運に對して異質者としての寄與を與へたいと云ふ希望からも筆者はそれを選びたくない。従つて問題は第二と第三の何れを選ぶかと云ふことになるのであらう。然るにこの第二の和英並用法は既に朝鮮や臺灣で試験済みのやうに虹絳取らずの結果に終る恐れが非常に多い。現在の日本に於ては適當の教師をうる事が困難であるから、その結果は更らに悪いことが想像される。國民が確實に思考しうる手段を失ふことにもなれば大變である。第三のローマ字を採用して抽象的思想表現手段の代替者を求める方法は適當の代替者があるか否かによつてその價值が決定され

る。漢字をローマ字に代へれば同音異義の語の取扱ひに極めて大きな不便が起ることは云ふまでもない。これを支那音の輸入によつて區別することも一法として考へられるが、筆者はそれは實際上不可能であると考へる。従つて我々に與へられる唯一の方法は不便でない程度と同音異義語を保留し、不便なものは本來の日本語若くは歐米語によつて置き替へること以外にはないと思はれる。この方法は視覚的な漢字による方法ほど自由ではなく、その點で代替者としての價値は幾分劣るとも考へられるが、併し實用的にはそれで充分なのではないかとも思はれるのである。こゝに於て結論としては主としてこの方法を採用することとし、一方英語の學習を現在より以上に努力することによつて新しい日本語の發展を期待するより他にはないのではあるまいか。

### 三、具體的對策

そこでローマ字を採用し、日本語が單なる具體的な低級言語に墮落することを防止するために、抽象的思想の表現手段として主として歐米語を輸入するとすれば、それは在來の日本語が漢字假名混り文であつたのと同様に、

歐米語混りローマ字文になることを意味する。漢語混り假名文が發達しえた過去の日本語の經驗からすれば、歐米語混りローマ字文發達の可能性は過去の經驗によつて保障されてゐるとも云ふことができる。漢語混り假名文の發達は必ずしも古いことではなかつた。近松の作品はローマで書いても恐らく大きな不便はないであらう。馬琴あたりとすればそれは高々百年に過ぎない。

かく我々の行くべき根本方向が決定されたとしても、直ちに全面的なローマ字採用に走ることはできない。以下その實行に際して注意すべき重要事項について簡単に考察して置くことにしよう。

一、先づ教科書、新聞及び雜誌を全面的協定の下に、或はむしろ強制的に、制限漢字による横書き假名混り文にすること。他の出版物は自由に委ねて置いてもよろしい。併し上述のものに準ずる出版物は嚴格にそれを實行しなければならぬ。これが出來ないほどならば凡ては失敗に終ること、換言すれば日本は滅亡することを覺悟しなければならぬであらう。

二、横書きにした出版物には漸次ローマ字及び歐米語

を混へて行くこと。外來語及び術語は成るべくローマ字で書くやうにしなければならぬ。而して或る時期に於て思ひ切つて他の部分をもローマ字に切り替へるのである。ローマ字の表記法は國定のものを用ひるのを原則とするが、如何なる表記法も許容するだけの大度がなければならぬ。從來の如き見にくい内輪もめはやめなければならぬ。外來語は原則として原の綴りのまゝとするのがよろしい。

三、教育に甚深の注意を用ひること。一般民衆に對してローマ字教育の機會を容易に與へ、そのためには凡ゆる機關、例へば新聞等にもローマ字欄を漸次増大して行くことが必要である。小學校では一年生からローマ字を教へることにする。片假名及び平假名を一年二年で教へてゐるが、これは在來の通りとし、これと平行してローマ字を教へ、ローマ字文を交へて行くことが最良の方法であると思はれる。これは兒童にとつて何等負擔を増加するものでない。五六年生には英語をも課すべきである。一方兒童用讀物は凡て横書き漢字假名ローマ字混り文としなければならぬ。

然るにこの教育の面に於て最も注意しなければならぬ點はローマ字の導入と共に擡頭すべき國語輕視の傾向を極力阻止しなければならぬと云ふことである。ローマ字の導入は將來の國語に一大變革を齎らすことは必至である。この變革を行ふものは實に現在の青少年であつて、彼らが有する國語に對する豊かなる感覺が國語をよいものにする唯一の保障であることは云ふまでもない。従つて彼らは今までも増して國語の、特によき國語の習得に精進しなければならぬのである。かう云ふと直ちにそれは彼らの負擔を過重するものであると云ふ反對論が起るであらう。事實ローマ字論者中の或るものは彼らの負擔を輕減するためにのみローマ字の採用を主張してゐる。若しローマ字を採用しても國語の負擔を輕減しなければそれは全く無意味であると云ふ人があるかも知れない。筆者の意見はこれとは全く對蹠的な位置にある。先づローマ字の採用は負擔の輕減のためではなく、前にも述べたやうに世界情勢の變化に對應せんがためである。第二に國語の學習は兒童に取つて決して過重な負擔ではないと考へてゐる。

この最後の主張は餘り常識とかけ離れてゐるので、それを心理學の素養のない人に説明することは相當困難である。併し兎に角それを簡単に説明して見よう。先づ兒童の記憶能力は實際的には無限に近いほど大きいと同時に、或る程度以上高級なる精神作用に對しては全く無力であると云ふことが擧げられる。二三歳兒が單語を覺えるスピードが如何に大きいかは少し彼らを觀察すれば直ちにわかることである。小學六年生にでもなれば例へば近松を凡て讀破することも可能である。これは或る特異の天才兒に限るのではなく、むしろさうなる狀況が準備されれば、はつきりしたことは勿論云へないが、約半數の兒童にはむづかしいことではないと思はれる。現代の兒童の讀書力が貧弱になつたのは最近代に於ける教育が兒童を餘りにかばひ過ぎ、特に國語教育に於ては薄べらな教科書の瑣細なデテイルの完全記憶を強ひ、適當なる科外讀物の糧を與へなかつた結果である。この點は當面の問題とは離れるが、今後はかゝる教育法の徹底的改革が要求される。然るに一方兒童の理解力にはその年齢に應じて超ゆべからざる限度がある。近頃兒童の科學教育

が強調されるが、科學的知識の理解には高級精神作用の發達を必然の前提とする故に、大體中學三年以前の兒童に對して「科學する心」などを植ゑつけんとすることは凡そ無意味であると云はなければならぬのである。或る人は「イヌ」と云ふ假名を覺えるとき dog を覺え、「いぬ」を覺えるときに *dog* の習性を覺え、「犬」を覺える暇に *dog* の效用を覺えることが可能であると云ふ。これは心理學上に所謂「誤れる要素觀」であつて、我々の知識はもつと有機的綜合的に構成される。今人工的に十の無意味語を作り、これを夫々十の無意味圖形と聯合させて繰返へし記憶させたとしたら、翌日にはその殆んど凡てが忘れ去られて了ふ。これに反して *dog* の具體的概念を把握せる後にはこれに關する無数の有用なる屬性が凡てかゝる概念を固定させるやうに集注的に働くことができるやうになるのである。従つてよし論者が云ふやうに機械的記憶が可能であるとしても、それは兒童の年齢に應じた或る低級なる思想の範圍に止まるのであつて、如何に努力しても彼れらをその心性の發達段階を超えた高級の思想圈に導くことは不可能事に屬するのである。



この意味に於て兒童に教へうる基本的知識には一定の限界があつて、その量は恐らく午前中の比較的少ない時間で充分である程度に過ぎない。爾餘の知識は彼らの興味を惹起しうる聯關中に織り込まれてゐる限り、極めて楽しく、又極めて多量に、容易に習得されるであらう。それは文字に關する限りそれらを彼らが面白く讀みうる適當なる科外讀物中に織り込みさへすればよい。唯現在の日本にはかゝる科外讀物が少ない。従つてそのためにはこれを計畫的に編纂し、容易に彼らが利用しうるやうな施設を工夫することが要求されるに過ぎない。元來知識には自らそれを再生しうる程度に鞏固なことを必要とするものと、唯知つてゐると云ふ程度の再認的知識でよいものとあり、學科の性質、及びその部分によつてこれらを區別して教ふべきものであるのに、在來の教育はこれらを一律に鞏固なる再生的知識とせんとしたところにその最大の缺陷が存するのであるが、この點を改革すれば兒童の負擔の問題は解消するのである。この點については精しい説明を必要とするが、こゝにはそれを述べる餘裕はない。

四、最後に從來の國語、國字論に於て説かれたところは、その殆んど凡てが末節の議論であつたことを強調せざるをえない。國語改良論に於て人々が最も力を入れたのは悪い新造語に對する危惧であつた。併し悪い新造語と雖もそれは心理的必然性があつて生ずるのである。國語が亂れるのはその背後に働く國民思想が活潑であることの證據であるとも云へる。又悪い新造語が出来る原理と美しい新造語が出来る原理とは本質的には同じであることを忘れることができない。唯悪いものでその根柢が浅いものは忽ちにして淘汰される。従つてよい國語を作るためには悪いものを抑壓するよりも（これは實は人力ではどうにもならない事柄である）善いものをどしどし作ることを努力しなければならぬ。消極政策はこの場合全く無力であつて、唯積極政策のみが要求される。縦書き横書きの論なども全く末梢的である。心理的に云つて横書きが優れてゐることは明瞭である。素より縦書きにも長所はある。併し我々がどうしても横書きを採用しなければならぬ理由は單なる兩者の便不便にあるのではない。それは客觀的情勢の變化に順應し、而も日本語の長所を

保存しながら、日本を文化的崩壊から救ふために他ならぬ。前にも述べたやうに眞に日本的ではない借り物の漢字を保存するために現在の書記法に固執するならば、恰も今次の敗戦によつて政治的日本の滅亡したやうに、近き將來に於て文化的日本も亦滅亡しなければならぬ運命にあることを洞察するからである。而もその直接的原因は單に一般的な世界情勢の變化のみに存するのではなく、言語が再度聽覺運動的な思想の運搬車たるの役割を演ずるやうになつたと云ふ極めて具體的な情勢變化に存するのである。物質文明の進歩は原子爆彈の發明となり、戦争の様相を一變せしめた。ラヂオやタイプライタアの發明は今のところ未だ大した影響を現はさないとしても、これが極めて大きな思想的革命の前兆であることは心ある者の眼には鮮やかに映るのである。素より筆者は唯物論的ののみ事柄を考へようとしてゐるのではない。かゝる變化を洞察する先覺者の精神の働きのみが物質の力を左右することができることを信すればこそかゝる説をなすのである。

ローマ字を採用しても英語がうまくなるわけではないと云ふ議論のうちには極めて優れた洞察を含んでゐる。

英語がうまくなるためには別途の對策を必要とするであらう。併し我々は英語がうまくなるためにローマ字を採用せよと云ふのではない。ローマ字の採用は歐米語混り日本語の發達に便利であり、タイプライタア式文明の發達に順應しうる可能性が大きいからである。又ローマ字を採用するとして如何なる式によるかと云ふ議論の如きも、筆者には全く暇つぶしとしか思はれない。素より何か一定の様式を決定しなければならぬことは必至である。併しそれは他の凡ゆる様式を排斥するものであつてはならない。言語もその表記法も謂はゞ一つの生き物であつて、最もよいものが生き残るであらう。筆者と同じやうにラムプから電燈に、圓太郎馬車から飛行機へと時の變遷を経験した老人共よ。身につまされた折角の經驗を生かして、せめては若者達の保守主義を打ち破る先き拂ひの役目でも引き受けようではないか。日本刀がよかつたからこれからも日本刀で行かうと云ふやうな議論はやめにしようではないか。我々は世界一の藝術品とも云ふべき日本語を過去のものとして後に残し、又尠くとも實踐の面に於てはそれに對する深き深き愛着をも思ひ切つて斷ち切らなければならぬ世界狀勢に直面してゐるのである。